

二者性、介護の根拠、国家止揚の拠点

三好春樹

最自悟、という名前を知ったのは、私がまだ高校生で、54年も前のことでした。「情況」という名の雑誌の文章に、アジテートされたのが最初です。

その後私は、校長室を占拠して退学処分となります。その原因の一部は氏にあると言っても間違いありません。

さらにその後、新左翼の活動家になり、逮捕されて留置場に入っている間に、所属していたセクトは肉ゲバに突入してしまいました。

嫌気がさして仲間たちと共に活動を離れた
ものの、政治にも帰れず、生活にも着地でき
ない、宙ぶらりんの状況が続きました。

そんなときに偶然就転したのが老人介護と
いう仕事で、新しい世界が拓かれた思いでし
た。

名前を知ってから30数年後、実際に講演に
招こうということになりました。そのきっかけ
は介護保険制度が始まったことでした。

「介護の社会化」を掲げて始まった介護保険は、前近代的な措置から契約へとという、介護を近代化するという鳴りもの入りでした。私たちが介護転換は、それにかあかな期待を持っていました。

とこのも、それまでの介護の根拠は、倫理でした。健全な倫理感を持った人もたくさんいました。しかし大多数は、俗物の“福祉ボス”たちが、政治屋とつるんで、“倫理”で介護転換を脅して安く保っていらるとこののが

事情でした。

新しい制度によってそれが少しでも改善するのではと期待していたのです。

しかし、制度が始まると、競争社会を勝ち残った大企業が「保護」に進出し、「保護の社会化」とは「保護の資本主義社会化」にすぎないことがあぐに判明します。

私たちが「保護」を続ける根拠は何だろう。古びた倫理主義ではない。かといって新しい「ク

ローバリスムでもな。 5 10 15 20

私たちは弁護士。最首さんは弁護士。立場は違っていて、ときには相及することもある。しかし、あの東大闘争を経て、皇子さんと出会って弁護士という世界に居つづける彼なら、私たちに共通の根拠を語ってしるに違いない、その確信がありました。

最首さんは、柔和な表情ながら、ときには強く断言されます。「契約なんかで弁護士がど

と

きるわけがない！」と。

「なにがプラスなことをしていると思っ
ちゃダメ。介護は、マイナスをゼロに近づける
こと」

この発言から「正義感で介護をしない」が
介護界の相言葉になったくらいです。

そして、介護の根拠として語られたのが、
「内発的義務」ということば。

そうか、至上からの、ときに脅迫的ともな
り倫理でもなく、社会からの金もうけの圧力

でもよく「内発的義務」が!

再び「最首さんの話が聴きたい」と介護職
が言い出したのは、あの相模原の施設での事
件があった直後である。

そのときに語られたのが「二者性」。

「義務」には、国家から押しつけられる感
じがあるし、「内発的」だとそれは私という
個体から発しているイメージだ。でも「二者
性」は、わたしとあなたの両から生じている。

「国家はその“二者性”を解体して国家に従属せよと迫っている」とも。

国家を止揚せんとしたマルクスの思想は、皮肉にも、マルクス主義によって裏切られる。でも、国家の無化が夢物語りだとは思いたくない。「二者性」は、介護することの根拠であるとともに、国家に拮抗する拠点でもある。介護は国家とは最も遠いところにある。